

動物風土記 1

クマ●シカ●イノシシ●ウサギ●ハト●カラス

田淵実夫著



こみねライブラリー



動物風土記 1

クマ●シカ●イノシシ●ウサギ●ハト●カラス



田淵実夫著



小峰書店

著者紹介

田淵実夫（たぶち じつお）

1909年広島県三次に生まれる。

旧制中高校・大学教官，広島市立図書館長等をへて現在広島比治山短大教授。民俗学・言語学専攻。

著者に「石垣」「筆」「新日本風土記」「日本縦断随筆」等がある。

動物風土記 1

950円

1979年2月25日 第1刷発行

*

著 者 田 淵 実 夫
 た ぶ ち じ つ お
発行者 小 峰 広 恵

本文組版／type & たいぼ
印刷／三秀舎 製本／文勇堂製本工業

発行所 株式会社小峰書店
160 東京都新宿区舟町6 ☎(03)357-3521
振替口座 東京6-195544番

8339-7202-2349

©1979

はじめに

動物の話ほど人々が興味をもつものはありません。人が動物の話に興味をもつのは、人に動物のことをよく知っておこうとする本能があるからです。他の動物のことをよく知っていないくは、人間は長いあいだ生きつづけてはこれなかったのです。

石器時代に人間の遠い先祖が住んでいたほら穴のかべには、野牛やウマやトナカイなどの絵が残されています。それらの絵は、古代の人間が、それらの動物を狩りの目あてにしていたことを語っています。それらの動物は人間の食物となるたいせつな動物だったのですが、反対に古代の人間は猛獣やヘビ・ワニなどにえものとしておそわれる危険にもさらされていたのです。古代の人間にとっては、そのどちらの動物も、大きく自分たちの命につながっ

ていたのだ、それらの動物を神としてあがめるばかりか、なかにはそれらの動物を自分たちの先祖だと信じる者さえいたのでした。

そのような深い動物とのつながりの中で、人間はだんだんと多くの動物を手なずけて、自分たちの生活に役立てるとともに、手なずけられぬ動物とは必死に戦いあつてもきたのでした。そして、そのうちに、人間は、どんな動物にも、しだいに愛情と賛美の氣持を深めていきました。たえずかれら動物の動きを見守っているうちに、かれらのもつけなげさもたくましさも、くわしく知らされてきたからです。わたしたち人間のあいだに、かれら動物をめぐるとりどりの行事や物語が生みだされてきたのは、みんなかれらに対する愛情や賛美の氣持があつたからのことです。

日本でも、冬の夜、いろりをかこむ山里の人たちのあいだで、いちばんにはずんだのは動物話でした。幼い子どもたちは、動物をめぐるいろいろな行事に参加したり、それらの行事を見守ってきたりしていましたが、さらに、おとなたちから聞かされる動物話は、胸ときめくほどにおもしろく、動物の

ことばかりでなく、先祖せんぞの人たちのことまでもよく承知しやうちさせてくれるのでした。

時代はすすんでも、人間と動物とのかかわりあいの歴史には、まだよく明かされていないふしも多いのです。わたしも、ひとつ、いろいろたのおじいさんになって、若い皆さんに、わたし流りゅうの動物話をしてみようと思い立ったのが、この「動物風土記」を書くことになった動機どうきです。わたしは、幼いころ、多くの家畜かちくの中で育ったので、とても動物好きなのです。

昭和五十三年 八月二十日

田 淵 実 夫

目次

まえがき

*

ちちしろ水 ● クマの話 7

角とぎ ● シカの話 31

ふすいの床 ● イノシシの話 63

しばかじり ● ウサギの話 99

ポポとグル ● ハトの話 129

カアカア祭り ● カラスの話 167

*

解説

谷川健一
204

造本設計／粕谷 弘

装画・さし絵／田代三善

写真資料提供／佐々木雄一郎

水野仲彦

秋田魁新報社

多摩動物公園

東京動物園協会

宮島町観光課

ち
ち
し
ろ
水

●
ク
マ
の
話



—

足柄山あしがらやまの金時きんときが、クマとすもうをとったというのは、いかにもほほえましいお話です。「クマはコロリと負けました」——そのクマは、かわいいではありませんか。

むかし、ある村人が山へしばかりにいくと、子グマが出てきて、さかんにすもうをいどむので、相手あいてになつてやると、子グマはよく日も待ちかねていて、まただきついてきました。そんなことがいく日かつづくと、子グマは、村人のたばねるしばを一わずつかついでいつてはつまかさねてくれるのでした。それはちやうど、おじいさんと孫まごとがいつしよに働いているようだったといえます。たぶん、つくり話ではありましようが、この子グマもかわいいではありませんか。

クマは、じつさい、見るからにくめない動物です。まんまるいクリクリ目



ツキノワグマの親子

をしていて、おもちゃのクマのように、足を広げてすわることができます。

以前、わたくしの郷里きょうりの村の猟師りやうしの人が、生まれてまだふた月ぐらいしかたっていないと思われる子グマを一頭、ひろつてきたことがありました。赤んぼ

うのよく太っているのを「クマの子のようだ」といいますが、ほんとにころころするほどよく太った「子グマのコロちゃん」で、胸むなもとの白い月の輪が、小さいよだれかけのように見えるのも、あいくるしいものでした。

猟師りやうしのおかみさんは、主人が殺生せつしょうをする罪つみほろぼしに育ててやるのだと、村をだき歩いていました。おかみさんにも、ちようど赤んぼうがありました。したが、村の婦人ふじんたちも、クマの子にお乳ちちをすわせると、お産さんがらくになるのだなどといつては、おもしろ半分に、すわせてやっていました。

そのうち、子グマはすっかり獵師りようしのおかみさんになつて、おなかですくと、とことことよつてきて、ひぎにはいあがり、ひとりでふところにもぐりこんでは、お乳ちちをふくんでいました。だから、おかみさんのかわいがりかたは、まったくわが子同様どうようで、村の人たちも「ごん太、ごん太」と、ごきげんをとつてやつていましたが、一年後には世話する人があつて、大阪の動物園にもらわれていきました。その時には、おかみさんは、オンオンと声をはなつて泣ないたということです。

このクマの子は、母グマが撃うたれて浮浪児ふうろうじになり、山の中をほつつき歩いていたのをひろわれたのですが、クマはたいてい、毎年二、三月のころ、穴あなの中で二頭の子を産うみます。はじめのうちは、手のひらに乗るほど小さく、目もあいていないので、乳ちちで育てますが、春あたたかくなってからは、母グマはいつもその二頭の子をひきつれてえさひろいに歩きまわります。それを山村の人は「若子わかこ引き」とか「三つグマ」とかいつています。

クマはほんらいは肉食動物ですが、動物性のもよりもむしろ植物性のも

をこのむようで、木の芽、木の実、山のイモ、ウサギ、魚、カニ、昆虫類^{こんちゅうるい}など、手にはいるものならなんでもとつてごちや食います。

母グマは手ごろなえさが見つかると、自分はわざとはたで見えて、子グマにとらせてはえさの練習をさせたりします。

谷の小川で母グマが岩をだきあげて、その下のカニをとらせているのを獵師^{りようし}に見つけられ、おどろいて岩をとりおとしたひょうしに、子グマをつぶしてしまったので、母グマはかなしみのあまり、にげようとせず、そのまま撃ちとられたというあわれな話までつたわっています。

母グマはそうして一年のあいだは、子グマをつれ歩きますが、つぎの子ができると、二歳子^{さいご}のほうは、かみついたりおどしたりして巢^すに入れず、追いやろうてしまいます。それで二歳子^{さいご}をヤライゴといいますが、新しい子を育てるためには、クマとしてはしかたない定めなのです。

追いやらわれた二歳グマは、しばらくのあいだは巢^すのまわりをはなれず、母グマをしようと鳴き歩きますが、そのうちに、だんだんと一本立ちの性根^{しょうね}がで

きてきて、やがてどこかへすがたをかくしてしまいます。それでも、たまには「古子持ち」といって、母グマに新しい子ができず、よく年も二歳子をつれ歩いていることがあります。新しい子ができなければ、母グマはけっして二歳子にたいしても、じゃけんなのでないことが、それで知られるわけです。

クマの子も二歳グマになると、だんだんと気があらくなって、たいていのけものにはおそれなくなります。しかし、ツキノワグマは元来、どちらかといえば気の弱いおとなしい動物なのです。だから、どんな大グマになっても、二本足で歩く人間には、自分のほうからおそいかかってくることはめつたにありません。たいていの場合は、人声を聞いたり、人のすがたを見かけただけで、とつとつとにげてしまいます。

クマが人におそいかかってくるのは、きつく攻撃をくわえられたときか、ふいにおどろいたときか、あるいは子グマをつれ歩いているようなときだけです。しかし、一度人をおそつたことのあるクマは、ごろつき根性がついてしまつて、人をおそれなくなることは事実です。だから登山家などは、そのようなクマに

出くわすことをおそれて、霧の深いときなどは、たえず高声で話をしたり、すがねを鳴らしたりして、警戒しながらすすんでいきます。

クマが人に向かつてくるときには、うしろ足でつつ立ち、両手のつめをそれこそくまでのようにひらいて、くみくようなしせいをとるのがくせです。そのときを待ち受けて撃つようになったら、猟師もいちにんまえだといわれています。

二

ツキノワグマは、日本アルプスや、東北地方のおく深い山に多くすんでいますが、その地方の猟師がクマ狩りをおこなうのは、おもに山々が雪にうもれるあと先のころです。山々に雪がつもりだすと、猟師はしのげなくなり、クマもすっかり穴にこもってしまうからです。

クマ狩りには、どこでもひとりで行くことはなく、たいてい数人の猟師と勢



猟師たちはクマを見つけると、てばやく配置をきめる。勢子と供犬はわめき声をあげて、いよいよ巻き狩りがはじまる。

子とが手をくんでやります。それを信州（長野県）などでは、クマのタツマ猟とよんでいます。タツマというのは、撃ち手の配置のことです。クマ猟では、この配置がたいせつです。配置が悪いと、せっかく見つけたクマもとりにがしてしまいます。

それで、猟師たちはクマを見つけると、てばやく適当なタツマをきめて、どんなに遠くても、一時間以内には、それぞれその定め場所にいるようにつとめます。一時間あまりたつと、猟師仲間のおきまりで、勢子のほうから合図の一発がぶつばなされ、いよいよ巻き狩りが開始されるからです。

数人の勢子はその供犬とともに、銃を鳴らし、